2020年9月2日　（水曜日）　長岡新聞

追手門学院のパワハラ研修と関連して

学校法人・追手門学院が開いた研修で、「腐ったミカンを置いておけない」などと退職を強要された職員三人が、同学院理事長と研修を担ったコンサルタント会社に損害賠償などを求めて、大阪地裁に提訴した【本紙既報】。これをめぐって教育関係者や労働関係者の間で、近年企業が新人教育やリストラを進めるために外部の研修会社を使っておこなってきた悪徳研修（「ブラック研修」）への批判が高まっている。

人格破壊し労働者を奴隷に

企業の新人研修で自殺者も

「自己啓発」ビジネスが跋扈

追手門学院の研修は二〇一六年、「自律的キャリア形成研修」として職員一八人を大阪市内のビルの窓に暗幕を張った一室に集め、五日間連続で毎日八時間おこなわれた。学院の依頼を受けたコンサル企業・ブレインアカデミーの講師が「あなたのように腐ったミカンを追手門の中に置いておくわけにはいかない」「負のオーラばかりだ」「もうチャンスがない」などと、全人格を否定する言葉を浴びせ退職以外に人生はないと思わせる言動をくり返した。このため、職員のなかにはうつ病を発したり、休職をよぎなくされ解雇された者もいた。

下関の梅光学院でもその少し前に、同じブレインアカデミーによる研修で、参加者に罵倒や叱咤をくり返し、「能力がないからよそに行ったらどうか」「人生の棚卸し」などと精神的に追い詰めて退職に追い込んだことがあり、大学関係者と市民から厳しい批判が集まった。

ブレインアカデミーは私立学校を対象に人材紹介、人材派遣、人事コンサルティングなどをおこなう企業で、「優秀な教師」を発掘し募集から面接、採用、人事まで支援することを掲げている。

このたびの事件は、そのような教育ビジネスが学校に乗り込んでおこなう教職員の勤務評価から解雇までの「支援」が、どのようなものかを赤裸々に示すことになった。

この事件はまた、「即使える人材育成」「自発的な退職実現」のために、職場内ではできないパワハラを駆使した研修を外部専門会社に丸投げしている現実の氷山の一角にすぎないこと、さらには今の日本の雇用と非雇用の関係がいかに非人間的な支配関係に置かれているかを考えさせるものとなっている。

「ブラック研修」が社会問題になった一つのきっかけは二〇一三年、製薬会社・ゼリア新薬工業で勤めていた男性（二二歳）が新入社員研修で精神疾患を発症し自殺した事件が発覚したことであった。この新人研修は、会社が指定した宿泊施設に受講者を四月から八月まで五カ月余り缶詰め状態にし、外部業者が派遣した講師による「意識行動改革研修」であった。

男性は「過去のいじめ体験」や「吃音」をしつこくとりあげられたうえ、提出した研修報告書に、講師から「いつまで天狗やっている」などと赤ペンで叱咤されるなかで、一カ月半が経過したころ精神的に支障を来した。そのため帰宅するよう命じられ、自宅に向かう途中みずから命を絶った。これは、「業務上の死亡だった」として労災認定を受けた。

この研修に参加していた同僚たちは、「一日の睡眠時間は三時間ほどしかなかった」「講師は常に命令口調で、ときには馬鹿にするなど罵声を浴びせてきた」と証言している。ある教育支援会社の代表が、複数の企業から受講生を集めた山中での二泊三日の新人研修で、新採用者を前に「皆さんの会社は一言でいったら、採用ミス」と脅しつけたことが問題になったこともある。

企業が外部の人材育成会社に委託したこの種の「新人研修」は、業務内

「採用ミス」と断じることから始まる新人研修。報道番組の放映に社会の批判が高まった（二〇一六年四月）

容や接客マナーなどを習得させるための教育研修ではない。山中など隔離された合宿所やセミナーハウスで、外部との連絡も許さぬ環境のもとで、社訓や歴代社長を丸暗記して大声で発表させる、休憩や睡眠時間を与えず身体と精神を追い詰めるなどのやり方で、「意識改革」の名のもとに人格を破壊する点にある。そうして、企業の求めに無条件でこたえる「新しい人間に生まれ変わる」ように誘導していくという。

社員研修に詳しい専門家は、「この種の研修は、過酷な労働で酷使し、働けなくなれば退職に追い込むという使い潰しを目的にしている」「このタイプの社員研修は集団の意志が自分の意志だと思えるまで調教し、仕立てていく。参加者を極限状態にまで追い込んで思考力を奪ってから、強制的に価値を注入する、という手法がとられることが多い」と指摘している。

使い古された洗脳の手法

非正規拡大の下で

内藤朝雄・明治大学准教授（社会学、社会心理学）は、『POSSE』二四巻（二〇一四年九月）で「精神変造（洗脳）的な社員研修は本来の業務遂行訓練ではなく、人格をその人のものではなく職場組織のものとし、精神変造を社員教育としてほしいままにする」ためのものだと指摘。「わざと理不尽で予測不能な圧迫を加えて屈服させ、さらに悦服させるといったことは、その奴隷化プロセス開始のために運命のラッパを吹き鳴らす、使い古された手法」で、「カルト教団や洗脳セミナーでの常套手段」だと批判している。そのうえで、「人格支配」ということが労働問題の大きなテーマになっていることを付け加えている。

追手門学院のリストラ研修は「キャリア形成」、梅光学院のそれは「キャリア再開発」と名付けられていた。そして、講師が「当事者意識」「自責」といった言葉を強調し、「学校の経営状態がこうなったのはあなたたちの責任」「当事者意識を持って学校改革をしていかないといけない」と迫っていたことも明らかとなっている。

関西大学経済学部教授・植村邦彦『隠された奴隷制』（集英社新書）で、このようにみずからの人格を破壊し自発的に企業の奴隷となるよう迫る洗脳について、新自由主義のもとで羽振りをきかせてきた「能力開発」「自己啓発」との関連で問題にしている。「労働力の流動化」（企業の解雇自由）が当然のようにふりまかれ、非正規雇用が拡大するなかで、企業は労働者にそれに耐えうる能力を自己責任で高めるよう求めるようになった。そのもとで、「個人の自立心」や「自助努力」そのものに新しい市場を見出して登場してきたのが、「自己啓発セミナー」や「自己啓発本」というビジネスだったと指摘している。